

である。

本文の義烈空挺隊も特攻隊の一部であるが、原文は平成15年8月発表された増田民男氏の文章「義烈空挺隊」から引用させて頂いた。

昭和19年大東亜戦争も全域において敗戦状態で、サイパン、テナアン、グアムの3島が次々に玉砕した。その後、特にサイパンにおいては日本本土に対する爆撃基地として巨大な基地建设が始まり、戦略爆撃機B29が多数配備されるようになった。

その頃増田氏は、浜松市近郊で特殊部隊（忍者戦法）の訓練を受けておられたとのことで、当時はまだ航空総軍はなく、教導航空軍による強行着陸によるサイパン攻撃が企図されていた。

このため昭和19年11月、海軍爆撃隊と協力し、陸軍は重爆9機と偵察機4機で硫黄島を経由しサイパン基地を攻撃したが天候不良で失敗。その後撮影した空中写真は大成功、これで基地施設、B29の配置が明らかとなり、以後の攻撃に寄与している。

年末の12月になっても攻撃は続けられ出撃寸前のB29多数を撃破したが、我が軍も6機を失うという被害があった。このため、参謀本部は空挺作戦を検討、落下傘部隊では時間を要するの強行着陸を実行することになり、部隊は「挺進第1聯隊第4中隊」に決定

した。また、着陸後諸情報を参謀本部に報告するため、中野学校卒の10名（将校8、下士官2）が参加した。

この実行部隊に第1聯隊の第4中隊（奥山大尉）が選ばれたのは、パレンバン作戦で火災事故のため参加できなかった、第1聯隊に下命され、また第4中隊は中隊長の奥山大尉が工兵で爆破作業も専門であるためと思われる。

同年12月、奥山隊長（大尉）以下126名の義烈要員が埼玉県の航空士官学校で訓練し、正式に特別攻撃隊「義烈空挺隊」と命名された。ここで中野学校出身の将校8名と下士官2名が合流している。

しかし、当時の97式重爆撃機はオンボロ機で、しかも胴体着陸、無線機は隊長機のみという状態であった。経済大国の米英を相手にして勝つと思っていたのか、開戦時下つ端の私たちでさえ不安であったことを記憶している。

確かにハルノートは厳しいものだが、これもスターリンのスパイでルーズベルトの部下だったヒスが起案したもので、日米ともスターリンに操られていたと言ふべきであろう。

サイパン攻撃は12月24日（クリスマス・イブ）と予定されたが予期せぬ事態が発生、昭和20年米軍は硫黄島を攻撃、2月には米軍海兵師団が上陸、日本軍守備隊が敢闘したが3月中旬に玉

義烈空挺隊について

伊佐 二久 陸士55

私は陸軍予科士官学校を昭和14年に卒業。その時希望兵科の調査で航空兵を希望したが、歩兵を命じられてがっかりしたことがあった。しかし、もしも航空兵になっていたら特攻機を志願して戦死していたらう。その頃は君国のために命を捧げることを誇りと思っていた。当時同期生の航空兵はほとんど戦死か殉職で死亡していた時代

砕しサイパン攻撃は不能となった。3月10日にはサイパン発のB29の34機が東京大空襲を行っている。私(伊佐)は予科士官学校の区隊長を命ぜられて北千島から東京に赴任していたが、B29の大空襲で木造の日本家屋は全都焼け野原となり、数10万の一般市民が焼死した。これこそ戦争犯罪と

思っているが、原子爆弾やソビエトのシベリア抑留60万人と同じく「勝てば官軍」で東京裁判でも問題にされなかった。

B29に日本の戦闘機が体当たりするのを目にしたが、戦闘機は墜落、B29はそのまま飛び続けたのには驚いたものである。

日本が本土決戦を決意し各地で配備につきつあった4月1日、米軍6個師団が圧倒的な空・海支援下に沖縄本島に上陸した。上陸した米軍は北(読谷)、中(嘉手納)両飛行場を修復し、4月には海兵隊航空機100機が進出、5月には伊江島にも60機が進出して地上戦を直接支援していた。

この頃、義烈隊の一員である梶原少尉が、増田氏と同期の高橋氏に「武人の嗜みとして体に香水をかけ出撃の最後を飾りたい」と依頼し、高橋氏が下宿のおばさんに頼んで香水を入手し、あげたら次の一文が残されていた。「待望の命くだる。平素の志笑って

突き進む。特攻は蓋し急なること矢の如しか。(中略) 悠久の大義に生く。一足先に。

散る桜 残る桜も 散る桜
香水多謝 出撃前 梶原少尉
高橋 章 殿

当時増田氏は、熊本地区司令部で、県下配置の17個の整備部隊に遊撃戦の普及と地誌関係の整備等を命ぜられ多忙であった。6月初め、市内のスクリーンで義烈隊の出撃シーンを発見、しかも前述の梶原哲巳少尉が花束を抱いて飛行機に乗り込む姿を見たとのこと

で、60年過ぎてても忘れられない、と述べておられる。

5月になり大本営はようやく沖縄北、中飛行場攻撃を命じている。作戦名は「義号作戦」、攻撃目標は北、中の両飛行場、ここに強行着陸して制圧。97式重爆撃機12機に分乗し19時20分健軍飛行場を離陸、リーダー探知されないよう海面ストレスに飛行し、途中で進路を変えて攻撃する。

出撃は5月24日となり、奥山隊長以下126名、輸送飛行隊32名を加え138名が出撃した。義烈隊の着陸を支援するため第60、第110戦隊が着陸2時間前から爆撃支援した。

北飛行場には午後10時25分、1機が超低空で侵入したが、米軍砲火の集中攻撃で撃墜された。その6分後、3機

が進入しこれも撃墜されたが、1機のみ主翼で対空陣地をなぎ払い、米兵8名が戦死している。

その後5番目の飛行機が、管制塔から75メートルのところへ胴体着陸し、日本兵13名が飛び出して、米軍機を次々に爆破したり焼いたりして活躍したが、米軍の反撃で12名が戦死、残る1名もその後戦死している。

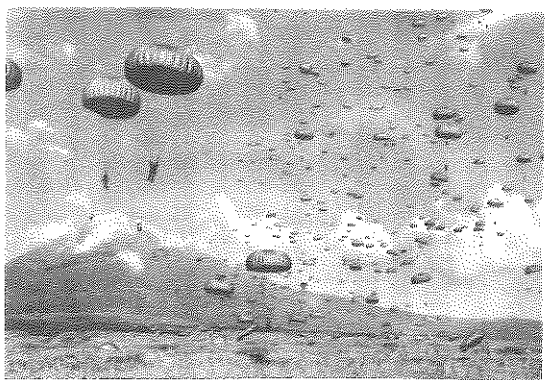
一夜明けて飛行場には遺体が多数散乱しており、撃墜された機内にも多くの遺体が確認されたが、最後まで奮闘した13名と併せ、69名が散華されている。戦死された方々のお名前は残念ながら不明の人が多いとのことである。

この攻撃で米軍は、数日間、飛行場の機能を失った。

毎年5月24日、またはその前後に、自衛隊健軍駐屯地で義烈空挺隊の慰霊祭が行われており、最近は中学生も郷土の遺産として義烈の碑を訪れ、参拝しているとのことである。

参謀本部のお偉方が、全員戦死と分かってこの攻撃を立案し実行させたこと、結果を見ても、活躍したのは13名のみで、これも皆戦死している。米軍の損害も数日間のみで日本軍の被害に比してあまりにも軽微である。

参謀連中は、日本兵士の尊い命を消耗品と同じように見ていたのではないかと憤りを感じている。



陸自第1空団の絵葉書 (伊佐氏提供)

以上、増田民男氏の「義烈空挺隊」から引用させて頂いたが、感謝申し上げますと共に、戦死された義烈空挺隊員皆様のご冥福をお祈りして、擱筆させていただきます。